

が行われている点である。その後の日本の大陸発展が推進されるなかで、治安維持法はいっそう改悪され、弾圧法規として強化されていくが、本書はそうした昭和期の政治外交史を考える前史として、貴重を示唆を与えている。

下ろされたものと思われるが、著者の問題関心を理解するうえにきわめて有用である。昭和史との関連で本書の提起している問題を理解するために、ぜひ一読をすすめたい。

のか、ここでゆっくり考え直してみてもよいだろう。そんなとき本書は、ちようどうつてつけの一冊である。

Thomas A. Scheak 一九二〇年ハングリー・ブダペスト生まれ。シカゴ大学、プリンストン大学で学び、現在はイソシアナ大学教授。一九六八年以降、国際誌 *Semiotica* の編集長。

T・A・シービオク著  
池上 嘉彦編訳

### 『自然と文化の記号論』

## パースの記号論を正統的に継承

評者 橋爪 大三郎

記号論と名がつけば何でも売れるとい

った、ひとところのおかしなブームもやっとな下火になった。記号論がどれほどの昔から、どれほどの深度で論じられてきた

の、著者が尊敬する最大の先行者は、C・パースである。パースは、ソシュールの同時代人で、一〇〇年ちかくも前、記号についての本格的な研究に取り組んでいた。パースとソシュールは影響関係がなく、独立に仕事をしたらしい。ソシュールの記号学の構想がその後、いわゆる

著者の努力はだから、パースを現代に復権し、彼の記号論を正統に継承・発展させることに注がれてきた。著者はパースのほか、モリス、ヤーコブソンらにも啓発されたが、このほど記号論四部作の完成をみたという。これは記号現象を、人間・動物を問わず、生命体に固有であるとみなすものだ。本書にもこの見解が、随所に反映している。

## 木鐸社

### フランス・ロマン主義の政治思想

小野紀明著  
19世紀初頭のヨーロッパ精神世界のロマン主義的思想を概念的に提示し、啓蒙の時代18世紀への反動としてのロマン主義の基本的性格を明らかにする大作。  
A 5判 456頁5000円

### 変貌するアメリカの家族

札幌クールセミナー⑤  
小川晃一・片山厚編  
伝統的な近代家族の崩壊、そして新しい家族のこと、blended family とよぶ。病理現象かたくまじさなのかを問う。46判 予価2300円

### 権利論

R.ドゥウォーキン著  
木下毅・小林公・野坂泰司訳  
反功利主義的政治哲学の権利論及基本概念として個人の影響を及ぼす法理論・政治理論を展開している注目の書。  
46判 360頁3500円

### 自生的秩序

ハイエクの法理論とその基礎  
嶋津 格著 46判 3000円  
ハイエクの知的活動は一つ、非常に整合的な理論をもつ。ある意味で現代の常識を覆す力がある前提を覆す力をもつ。本書はその法理論と哲学的な基礎に光を当てる。

東京・小石川 5-11-15-302  
Tel 814-4195 振替東京 126746

## 読書ノート

昨年未だの一四カ月間、新聞の論壇時評を担当した。毎月一〇日頃までに出揃う月刊・週刊誌に一通り目をおしたうえで、適当なテーマを二、三選んで関連論文を批評する。

『中央公論』が一〇〇周年を迎えるという好タイミングの合わさった年でもあった。そのせいかなんとも一頃に比べると、昨年の論壇はいくらか往年の精気をとりもどしたかのように思えた。

中曽根首相のいう「戦後政治の総決算」をめぐり、また防衛費一割増問題などをめぐり、久し振りに論壇での意見が真つ二つに割れた。注目すべきなのは、保守革新という在来型の線引きにそってではなく、保守対リベラルというアメリカ型の線引きにそって、意見が二分されるようになったという点である。

ただ、著者はそのあたりの芸が細かい。いっぽう行動主義の記号観にも批判的で、信頼がおける。

## 論壇の再生

佐和 隆光

論壇に寄稿することはあっても、総合雑誌の論文をみずからすすんで読むことはまれにしかなかった。そのわたしが、一四カ月にわたり強制的に雑誌論文を読まされたのだから、まことに骨身にこたえた。

昭和五〇年代にひたすら「保守化」の方向へと突き進んだわが国の思潮は、ここきてようやく潮の流れの向きを変え始めたかのような。論壇があるに一枚岩のなほ、それ自体の存在意義を損ないかねない。戦後四〇年を振り返ってみると、論壇が面白かった時期には、必ずといっていいほど世論を二分する激しい意見の対立があった。五〇年代に展開した保守化と革新の退潮は、いつの間にか論壇を一枚岩的に作りかえてしまった。革新はおろかりベラル派の主張ですが、しばし論壇から姿を消してしまっただけであ

おなじことは経済論壇に限ってもいえる。かつて一世を風びしたマルクス主義の立場からの経済談義には、近頃、めったにお目にかからなくなつた。ケインズ主義の立場からの論議ですら、いまやれつきとした対立派に位置するようになってしまった。

これが定義の問題かもしれない。しかし、定義が異なれば、記号論の名のもとに何を構想するかもまったく違ったものになる。実際、ひとくちに記号論といっても、ソシュールや言語学の系統のもの、パースの流れを汲むものなどがあって、双頭の鷲よろしく記号論の行く手をひき裂いている。わが国の紹介は、どちらかというとこれまでフランスに片寄っていたが、本書の刊行でいくぶんバランスも回復することだろう。

去年は、戦後四〇年を画する年であったし、また貿易摩擦問題という恰好の好餌に恵まれた年でもあった。その上、『世界』が創刊四〇周年を迎え、

情報理論などパースの知りえなかった知識を織りこみながら、記号の諸相の実用的で精細な分類を試みる。著者のコミュニケーションのモデルは、コード・メッセージ図式にもとづき、ヤーコブソンの

ものと比較的近い。また、ソシュールの恣意性の原理も、象徴記号と他の記号とを区別するなかに活かされている。

記号論の構想がいり乱れ、決着がつかないのは、著者も指摘するように、どれもまだ未熟で、方法的に基礎を固めた決定版が出ていないせいである。そういう仕事がおいそれと実を結ばずもないが、ぐずぐずしている、せつかく根づきかかった記号論のほうが雲散霧消してしまいかねない。そうなるまえに、議論

パースの記号論でもっとも有名なものは、記号を、類像(アイコン)／指標(インデックス)／象徴(シンボル)に三分したことだ。著者は、基本的にこの発想を踏襲し、遺伝子モデル、動物行動学、

京都大学教授・計量経済学、

あらゆる記号を分類しようとしたらすると、えてして大味な大風呂敷になり

た。が、著者はそのあたりの芸が細かい。いっぽう行動主義の記号観にも批判的で、信頼がおける。

の着実な前進をはかること。それを急ぐ熱情が行間から伝わってくる。評者もそれに異論はない。

### 学界での多彩な交流

ほかにこの本で嬉しい点を、ひとつ。それは、著者と交流のあった記号論者たちの、じつに多彩な姿がうかがわれることである。第二次大戦中に欧州から米国へ亡命したエミグレ世代の利点かもしれないが、シービオク氏の顔の広いこと。ちよつと指を折ってみるだけでも、ヤコブソン、レヴィ・ストロース、イエールムスレウ、スキナー、モリス、マリノフスキー、M・ミッド、M・ガードナー、ゴフマン、E・リーチ、……といった具合。評者には書物としてしか想い浮かばない、こんなそうそうたる顔触れが、どのように行き来しあつたか、回想のはし

ばしに触れるだけでも実に楽しい。記号論の血の通つた歴史をまのあたりにしたような気がする。

著者の本領はもうひとつ、学界のすぐれた組織者であることだ。国際記号学会の設立に尽力し、同学会誌の編集もながらく手がけている。人脈の広がりからもわかる。自分立場にこだわらない幅広い関心と包容力が、そうさせているのだろう。日本記号学会発足の際にも来日し、以来わが国の研究者とも縁が深い。わが学会は、評者も会員であるが、いろいろな事情でそろそろ悩みも出てくるようなので、氏のような息のながい組織者の存在は貴重に思える。

期待される。

（勤草書房 二六〇〇円）

## 新刊の窓

### 現代経済学ガイド

人と理論のプロファイル  
（日本経済新聞社編）  
（日本経済新聞社 一三〇〇円）

「社会科学の女王」ともてはやされた経済学だが、その危機が叫ばれて久しい。経済理論は精緻化する一方なのに、現実的な問題解決能力を著しく欠いているのが現状である。一九六〇年代、実際の経済政策の形成に貢献したケインズ理論・新古典派理論中心の分析手法が、石油ショックなど世界経済の体質変化の前に壁にぶち当たったことが極めて大きい原因

といえよう。

本書は、こうした主流理論の後退と引き換えに登場してきたさまざまな新しい理論を、その提唱者の顔顔とともに素描したものである。章立ては、「ポストケインジアン群像」(佐藤隆三)、「マネタリズム」(新開陽一)、「合理的期待学派」(中谷巖)、「サブライサイド経済学」(野口悠紀雄)など一章。本書はもともと新聞に連載したもので、一流執筆陣による簡明な解説は、一気に通読させる力をもっている。手近に最新理論を勉強したい人に格好の書。

### 伝統産業論

——その国際性の研究——  
（磯部 喜一著）  
（有斐閣 一万八〇〇円）

六五〇に及ぶ大著は、「伝統産業」の定義から始まる。そして代表的な業種

## ミネルガ書房

# モラル・サイエンスとしての経済学

間宮陽介著

経済学が抽象していった知識論、人間本性論、倫理観などの領域をモラル・サイエンスとしての経済学に復位することと現代経済学の危機脱出をめざした研究。これは、スミス、ヒューム、ミル、ケインズ、ハイエクの読み直しを通じて、知識、貨幣、消費、市場など経済学的重要概念を再検討する作業でもある。

二八〇〇円 千300

# イギリス近代史

村岡健次・川北稔編 ● 宗教改革から現代まで ジェントルマンと帝国という視角を提出。2000円 千300

# チャーチスト運動の研究

古賀秀男著 イギリス史上初の大衆的政治運動の成立・展開から社会主義との関係まで原史料主義で究明。初版一九七五年五五〇円 千300

# 経済学原理——「資本論」の問題点

中野 正著 「価値形態論」「産業循環論」などすぐれた業績を残して急逝した著者が、資本主義のメカニズムを解明する。二〇〇〇円 千300

# 競争と独占——産業組織論批判

越後和典著 新オーストリア学派を紹介しつつ、新しい市場経済観を提起。ペイン産業組織論と独禁政策の批判に説き及ぶ。二四〇〇円 千300



〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1  
☎(075) 581-5191 振替京都2-8076

『現代詩手帖』29巻3号：171. 思潮社

1986年3月

よく書きこまれた一冊である。思索のひだが著者の生理的な等身大に息づいている。誠実な筆致。昔なつかしい小路にふと舞いもどつたような気がした。

著者は、詩という名のことばの極限へ、果敢な漸進をはかる。素材はニーチェであり、一遍であり、ハイデガーであり、賢治・植谷その他存在を見つめた日本の作家達である。そして議論の要所では吉本隆明が、後見人の姿をあらわす。

素材の色濃い宗教性に、なにより注目すべきだろう。著者もまた求道者である。ほとんど書けそうにないことだけを、己れに課す。みえる。どの行も模索と呻吟に満ちている。こうした倫理的苦行の果てに、著者は救済の輪郭を望見しようとする。それは解放であつてよいはずだ。だが私はかすかに、閉塞感と報われない疲労のほうを感じてし、ロギカレトリカ

現代詩に縁のない私は、本書がどれほど現下の詩人たちの切実な模索に込めるものか、見当がつかない。社会学者として見取つた限りをのべるしかない。

著者菅谷氏がドイツ文学者としてどのような境位をえているかに、興味をひかれる。たとえば著者は、ハイデガーの章句に自分の訳を充てる。ことばと存在をめぐる西欧の思索が日本語に置き換わる／換わらぬことに



批評の根拠をおくようだ。そしてたとえば、ザイン(普遍存在の概念)を駆使してついに見逃される可能性が、ある／いるの区別によればわれわれにひらかれるという。神がいなくともよい。有情との交響。自然との和解。

——このみちすじはよく解る。だが問おう、著者は何語でこれ考えたのか？

著者は日本語で思索し、書を著す。日本の風土に根ざし、それをひき受けるべく。よろしい。安直な舶来屋より格段上だ。が、それにしては、この風土に対する異和の角度と方法が不足してはいないか。あるいは、著者の想い描く西歐が、日本語に置き換えたがために不用意に変歪してはいないか。あるいは、同じ思想をドイツ語で表現する普遍性よりも、吉本言語論に内属する自足を選んでいないか。

吉本氏は当代の国学者である。氏は、マルクス主義のロシア的変歪に抗して、己れの肉声でマルクスを思索することからはじめ、ついに浄土教的な共和思想を結実した。これはなおさらの変歪であるが、そうとう自覚的になされ、それゆえの世界的なあり。しかし著者は吉本氏を権威とする。そのため西歐思想本来の恰幅が、著者の手のなかでいくぶん瘦せてしまう。惜しむべきである。

## BOOKS

橋爪大三郎

# 求道者の模索と呻吟

critic

菅谷規矩雄『ロギカレトリカ』砂子屋書房・1900円